

【書評】

佐久間香子著『ボルネオ——森と人の関係史』
(春風社、2020年)

井口次郎

I 本書の要旨

本書は、現在サラワク州のムル国立公園となっている地域に、ロングハウスと呼ばれる村落を核として暮らして来た在地民コミュニティの100年間の、フィールドワークと資料分析に基づいて記した民族史である。

第I部の舞台はブルネイ・スルタンの支配下から白人王ジェームズ・ブルックに割譲され、河川交易が内陸の秩序を編成する1880年代から20世紀中葉までのサラワク北部である。調査対象のロングハウス・コミュニティであるロング・テラワン村は、サラワク王国への併合以前、ブルネイ・スルタンの影響下にあった時代から、トゥトー川流域において、河口部の港市と内陸部を接続する、最上流の交易物流拠点として台頭した。当時の海洋交易では、熱帯雨林からの林産物が主要交易品であり、先住民と華人商人らは、河川・陸路によるネットワークを張り巡らせて地域社会を編成してきた。港市を経由した商人が内陸部に鉄器、陶器、布などをもたらし、反対にツバメの巣などの林産物が輸出されることにより、それら交易の分岐点にある集落とその首長の勢力は強化された。港市分析を中心とするこれまでの東南アジア史研究では、内陸は「後背地」として受動的な対象とみなされてきた。しかし、ブルネイ・スルタン、そしてブルック家が統治してきた海洋交易を支えてきたのは、港市だけではない。本書では、内陸の交易拠点が地域社会を編成して、在地社会と為政者を結ぶ「在地の長」として存在した歴史を明らかにしている。これは、従来のボルネオ人類学では描かれてこなかった内陸社会の再考を促す。

続いて第II部では、上記に続く20世紀後半、ロングハウス・コミュニティの生活圏の国立公園指定と、先住民運動が描かれる。これらは、ロングハウス・コミュニティと、狩猟採集民であるプナン人との関係に大きな変化を迫った。ロングハウスから国立公園沿いの戸建て住宅群へ生活圏が拡大すると同時に、これまで森で遊動生活をしていたプナン人とロングハウスの人びとが日々隣り合って暮らすこととなった。そして、1980年代・90年代に起きたサラワクの熱帯雨林保護と先住民の権利回復を求める運動を通じて、世界的に有名になった「戦う先住民」プナン人への賞賛・援助は、近隣の集団であるロングハウス・コミュニティとプナン人との関係をいびつなものに変えていった。また、コミュニティの現金取得手段は、それまで出稼ぎ労働が主であったが、国立公園の観光業が主要になっ

た。かつて「伝統的」な現金取得手段だったツバメの巣の採集は、採集場所が国立公園内であったため、「違法」な活動として生業の表舞台から姿を消し、水面下で密かに続けられた。そして、熱帯雨林の商業伐採が飛躍的に拡大するに伴い、内陸の森に伐採道路が網の目のように張り巡らされた。交通・物流が川の時代から道路の時代に急速に移行し、河川交易の拠点としてのロングハウスの勢力は徐々に崩れていった。さらに続くのが、空の時代である。2000年にムル国立公園が世界遺産に登録されると、観光事業は拡大し、新空港から観光客、村人、林産物が大型旅客機で行き交うようになった。ミリをはじめとする都市が遠い存在ではなくなり、生活の一部に組み込まれた。他方、ムル村の形成・拡大と、都市移住により、ロングハウスの人びとは離散した。その一方で、ムルにおける狩猟と観光業によりロングハウスに残る人びとと都市に出た人びとがつながりを保ち、コミュニティの再編・強化が図られてきた。

この100年の間に、ロングハウス・コミュニティはかくも大きく変化したが、それは伝統的な社会・生活から近代的なそれへの単線的な変遷、と説明できるようなものではない。交易時代の交易拠点、植民地支配、出稼ぎ、先住民運動、国立公園設立、世界遺産登録による観光業の隆盛と、ロングハウス・コミュニティ住民たちは複雑な周囲の勢力との関係のなかで、生き抜いてきた。そして今もロングハウス・コミュニティは変化し存在し続けている。

II サラワクの熱帯林保護運動・先住民運動

評者は1990年代にサラワク州での熱帯林保全事業に協力したので、まず本書ではそれに関係する部分に関心を持った。

サラワク州では1960年代から違法も合法も含めた商業伐採が急速に拡大した。本書でも紹介されているスイス人の活動家ブルーノ・マンサー等の活動の結果、熱帯林破壊を批判する国際世論が高まるが、批判の矛先は、マレーシア政府、サラワク州政府のみならず、日本の総合商社にも向かった。サラワクで伐採された熱帯木材の主要な輸出先は、日本だったからである。日本では高度経済成長を迎え、コンクリート型枠用コンパネなどをはじめ、熱帯材需要が高まっていた。1989年、本書でも紹介されている環境NGO「熱帯雨林行動ネットワーク（Rainforest Action Network）」は、『ニューヨーク・タイムズ』に一面広告を出し、当時のブッシュ米国大統領や世銀総裁らの顔写真8枚と住所を並べ、熱帯雨林を救うため彼らにあてた投書を求めた。この中に当時の三菱商事社長の写真もあった。「地球環境保全に貢献する企業」という企業イメージを守る三菱商事は、これに応え、横浜国立大学の植物生態学者宮脇昭教授（当時）と協力して、1990年からサラワク州のマレーシア農業大学ビントゥル校の構内で熱帯林再生実験事業をはじめた。当時横浜国立大学で国際開発学を学んでいた評者は、その事業のために現地で働いた。著者が第9章で明らかにしている通り、1980年代からのサラワクの先住民運動は、ムル地域をはじめサラワク州に住む先住民とそれ以外の人びとの生活と政府との関係に大きな影響を与えた

が、めぐりめぐってそれは評者の行き先にも影響を与えたことになる。

その当時から、評者は何度かムル国立公園を訪れている。最初の訪問は1993年3月だった。本書にある通り、すでに国立公園は設立されていた(1974年)が、まだ世界遺産には登録されていなかった時期である。ミリから8人乗りくらいの小型飛行機に乗って、出来て間もない旧ムル空港に着陸したことを覚えている。そして、プナン人のために建てられたロングハウスをボートで通り過ぎたとき、現地人のガイドによるその説明は、素っ気ないものだった。評者は、先住民運動で主張された「戦うプナン人(高貴な野蛮人)」については聞いていた。そのガイドを、現地人と言うだけでプナン人と同一視していた評者は、保護区指定と森林伐採により、森での遊動生活を捨てざるを得なかった状況について、なんらかの思いが聞けるのかと身構えていた、あるいは期待していた。だから拍子抜けしたことを印象深くおぼえている。今となっては確認しようもないが、本書にあるように、先住民運動の結果、政府からさまざまな優遇措置を受けるようになったプナン人と、その影に追いやられたロング・テラワン村との間の対立が影響していたと考えると、得心もゆく。

Ⅲ 参加型保護区管理への教訓

本書の冒頭で著者は問う。「森が自然保護区に指定されることは、そこに暮らす人びとにとっていかなる変化をもたらすのか。国立公園さらには世界遺産に登録された森は、マレーシア国民および全人類の財産として、森の民による利用を禁止して保護することが正しいことなのだろうか」(本書:8)。

評者はこれまで、マレーシア・サバ州はじめ発展途上国での国立(州立)公園等の保護区・森林の保護に協力してきた。保護区管理の視点からは、公園・保護林内で居住ないし資源利用する人びとは、常に「問題」とされてきた。ただし、このような居住・利用は、先住民による伝統的・持続的とみなされるものから、換金目的の違法伐採・密猟まで多様であり、同じ保護区でも地域毎に背景も異なる。そこで、公園・保護区内に住み始めた時期や、居住・利用形態の持続性など、公園内資源利用者の「先住性」とも言える背景が問われることになり、認めるべき居住・利用と、そうではない居住・利用に線引きがなされることもある。そして本書にある通り、国立公園設立に伴い「先住民」として政府から手厚い支援を受けてきたプナン人と、同じく森に住む先住民でありながら「違法居住者」として扱われるロングハウス・コミュニティのように、その線引きが両者の間に緊張をもたらすこともある。

ムル村に限らず、先住民(正当な居住者)と違法居住者の間の線引きを妥当に行うことは常に難しい。まず、公園管理側の認識と、地域コミュニティの認識には違いがある。さらに地域コミュニティ内でも立場により歴史認識が異なる。それを理解しようとする「何層にも積み重ねられてきた『過去』の事象と経験」(本書:36)の藪の中に入り込むことになる。結果、実際にムルで行われたように、そうした線引きはおおむね政治的に行わ

れる。

評者がかつて JICA 技術協力専門家として働いたサバ州のクロッカー山脈公園では、2007 年に州公園法を改正して公園内に特別区を設け、地域住民の居住を認め、州政府と地域住民による同区の共同管理を目指した。それは日本政府の技術協力を受けて実施された公園管理であるが、その背景に本書で述べられている「先住民運動」の影響があったことはまちがいない（サバ州における「先住民運動」と呼べる運動は、サラワク州でのそれとは異なるものだが、保護区・森林保全にそれが及ぼした影響は同様と言えよう）。それまで公園内の土地利用を一切認めなかった州政府が、法改正もした上で、地域コミュニティの居住と利用を部分的に認めるようになった点で、それはまず大きな成果と捉えられる。

他方、この管理方針も、やはり公園周縁住民の居住・利用に「先住性」や「伝統的・持続的利用」を問い、それらによる線引きを行うものであった（それは一方的なものではなく住民参加によるものだったが）。また、公園周縁コミュニティにこのような働きかけをしなくとも、公園内での居住・資源利用という問題は解消されただろう、という身も蓋もない意見も聞かれる。村に続く交通インフラのみ整備されれば、周辺村と同様に若年層は自然に都市に流出し、過疎化が進んだと思われるからである。実際そうなったかは分からない。もしそうなったとして、それが保護区管理という点からだけでなく、地域コミュニティにとっても「正しい」解決法だったかは、分からない。ただ、本書で著者がムル村の人びとの歴史と現在を詳らかに明らかにしたように、公園周縁社会の歴史と現在を注意深く紐解いていけば、他の方針も見えたかもしれない、本書を読むと、そう思わずにはいられない。

IV 現代の人類学：調査対象へのまなざし・距離

「私に何を分かれというのだと、いささか乱暴な主張に対して戸惑いと苛立ちすら覚えた。だが、そんな私も、養子としてムルの家族に迎え入れられて共にひげイノシシの肉を分かち合い、酒を飲み、ひとつ屋根の下で川の字で寝ることが日常になるうち、次第に彼らに同調して『ホンマにそのとおりや』という調子で相槌を打つようになっていた」（本書：347-348）。

本書の帯にも引用されている、この「あとがき」の文章にあらわれている、著者の人類学者かつ個人としてのムルの人びとに対する姿勢に、強い共感をおぼえる。

調査対象村に家族として迎えられ寝食を共にする。熱帯雨林に囲まれた村落では、まず生活するだけでも大変な苦勞であろう（第 8 章のシカやイノシシの解体と調理はたいへん胸躍るものであるが）。かつ、緻密な調査を行い、たとえば「森の民の生活は伝統的で持続的」などといった本質論に頼らない、辛抱強い分析をする。それは、著者が書くように「接続詞のない文章のように、繋がりが分からない複数の語りをなんとか総合して理解できるようになる」、悪戦苦闘の、かつ発見に満ちた過程だったことだろう（本書：339）。

第 1 章にまとめられた、発祥から現在に至る文化人類学の発展の中で、サラワクに限ら

ず現代の文化人類学で問われている問題とは、応えることが大変難しいものであろう。「民族」の本質があらかじめ構造化されて存在し、その正しい表象は1つに収束するという想定の下、無邪気に対象の本質を分類・分析するというかつての文化人類学は、もうないらしい。かといって、民族や村落名や個人名までも脱構築した上で、対象の歴史があるがままに分析するというやり方も、先住民運動を経て民族の括りが実態として人びとの生活に現れるようになってから今に至る彼らのあり方を説明しない、という点でまた不十分らしい。著者は言う、「森には何層にも積み重ねられてきた『過去』の事象と経験があり、もはや村の古老の記憶の片隅に頼ることすら難しい。このような状況に、今日の人類学は直面しているのである」(本書:36)。

発展途上国の保護区周辺のコミュニティは、おおむね農村地域に位置し、かつ国家の枠組みにとられる過程にあり、サラワクに限らず一朝一夕には状況を理解しにくい。評者は、彼らを理解しようするとき、それが学術研究ではなく、時間・資源・用途の限られた調査であればなおさら、調査対象のコミュニティ・歴史について、そこそこ妥当で本質主義的な物語を自他ともに示すことで、手を打ってしまうだろう。そうではなく、公園周辺社会の歴史と現在を、その本質において理解するのではなく、かといってあるがままの記載でもなく、注意深く紐解いていく、「今を生きる」文化人類学者には、頭が下がる。

(いぐち・じろう (株)パデコ)

2023年5月2日掲載決定